

性アイデンティティ概念の検討

石原 留美¹⁾*, 井上 明子¹⁾, 松村 恵子²⁾

¹⁾ 香川県立保健医療大学大学院保健医療学研究科保健医療学専攻

²⁾ 香川県立保健医療大学大学院

Examination of Sexual Identity Concept

Rumi Ishihara¹⁾*, Akiko Inoue¹⁾, Keiko Matsumura²⁾

¹⁾ *The Graduate school of Kagawa Prefectural University of Health Sciences
Graduate school of health sciences <master's Degrees> Course of health Sciences*

²⁾ *The Graduate school of Kagawa Prefectural University of Health Sciences*

要旨

本概念の検討では、あたたかい人間性を豊かに育み、しなやかな性を生きていくために、性アイデンティティに関する今日的視点を整理し、その意味を考えることを目的とした。性アイデンティティとは、人間の性において主要な概念であり、性の意味・構成要素・意義及び生涯発達の視点からとらえ「個人のなかでまた他者との相互交渉による相互浸透行為の中で育むその人自身の性に対する確信」と定義した。人間の性の諸側面を統合し、性アイデンティティを生涯にわたり発達させていくことは、容易なことではないと考えられる。しかし、この自立し自律的に統合し、適応していこうとする力は、返せば自己実現への力強い原動力や人間の性に対するしなやかさの源になると示唆された。

Key Words: 性アイデンティティ (sexual identity), 概念 (concept),
視座 (viewpoint)

* 連絡先：〒761-0123 香川県高松市牟礼町原 281-1 香川県立保健医療大学大学院保健医療学研究科保健医療学専攻 石原 留美

* Correspondence to: Rumi Ishihara, The Graduate school of Kagawa Prefectural University of Health Sciences Graduate school of health sciences <master's Degrees> Course of health Sciences, 281-1 Murecho-hara, Takamatsu, Kagawa 761-0123 Japan

はじめに

性は、人間に性別が付与される瞬間から、人生を終えるその時まで一生寄り添い、様々な色どりを加えてくれる。その性別が遺伝的に決定する瞬間は、精子と卵子が融合する受精のときである。一方、社会から性別が付与される瞬間は、各種超音波機器の目覚ましい発展により、妊娠十数週の段階で外性器の形態から判断することも可能となった。そのため、生まれてきたときにはすでに、その性別に合ったとされる衣服や玩具などの物的環境が整えられ、親をはじめとする周囲の男性、女性としての役割期待もできあがっていることが多い。

しかし実際の性別はすべてが男性と女性に二分されてしまうものではなく、遺伝子的にはXYY, XXY, XO, XXXなど連続的な性が存在している。また心理的な側面においても、男性性と女性性だけでは説明のつかない多面的なパーソナリティを人間は持っている。そのため、個人の性に対し「思い込み」や「直感」で判断することは適切ではない。

この性の多様性について学び、他者との差異に対する信念対立を解消するためには、すべての人に対して生涯の各々のライフステージにおける教育機会は大変重要であり、現在、日本看護協会をはじめ各種団体が趣向を凝らした性教育を展開している。しかし日本においては性を「陰、淫、隠」とする社会通念が未だ根強く残っており、オープンに語りあえる機会は少ない。

それゆえ児童虐待、ドメスティック・バイオレンス、セクシュアルハラスメント、セクシュアルマイノリティに対する偏見など性に関する社会的問題が山積している。これらの問題においては、人間の性に関するアイデンティティの問題が絡み合い、非常に複雑な構造を呈する。被害者と加害者の性アイデンティティは危機的な状態にあり、自分自身の性に対する確信は不明瞭となり、自己と他者の欲求や権利について調和的なバランスを保つことが難しい。

そこで、本論文は助産師の立場から、人間の性において主要な概念である性アイデンティティに関する今日的視点を整理し、その意味を考えることで、あたたかい人間性を豊かに育み、しなやかな性を生きていくための視座について検討することを目的とする。

概念の検討

1. 性について

まず、一般的な辞典で定義されている「性」から、現代における日本語概念としての辞書的意味について記したい。

広辞苑(岩波書店、第6版、2008)

① うまれつき。さが。

② (多くは接尾語的に) 物事のたち・傾向。

③ (sex) 男女、雄雌の区別。

④ [言] (gender) 名詞を分類する文法範疇の一つ。

⑤ [社] ジェンダーに同じ。

大辞林(三省堂、改訂第4版、2009)

① 生まれつきもっている性質。生まれつき。さが。

② 男と女、または、めすとおすの区別。

→セックス・ジェンダー。

③ 男女両性間、あるいは同性間において生じる肉体的結合への欲求や衝動。また、それに基づく諸活動。

④ (gender) インド-ヨーロッパ語において、名詞・代名詞・形容詞などにみられる、男性・中性・女性などの文法上の区別。

⑤ 名詞の下に付いて、その性質・傾向をもっていることを表す。

「性」という言葉は、古くから日本に存在し、もともとは「生まれつき、さが」という意味で使われていた。今も辞典の一番目にはその意味が記されており、現在においても十分通用することが理解できる。この意味における「性」には、生まれもったものであって、それには逆らうことのできない、自分の力では変えることのできない運命的なものという含意がある。

その後、小田¹⁾によると明治に入ってから英語辞書でsexやsexualityの訳語のなかに「性」という語が登場し、明治後半の1910年頃には「性」という語が一語でsex, sexualityの意味で使われるようになったと述べている。朝倉²⁾によると、英語圏においてsexは第一義的には生物学的差異を表し、sexualityには生物学的な差異という意味は強調されず、性欲や性的指向、性行動といった内容が強調されていると述べており、その使い分けは明確化されている。一方、日本においてはsexualityの意味が曖昧であり、その使い分けが明確にはなっておらず、「性」という言葉は、性交という性的な行動としてsex = 性交と連想されやすい。

また「性」には、genderとしての意味もある。広辞苑においてgenderとは、

① 生物学的な性別を示すセックスに対して、社会的・文化的に形成される性別。作られた男らしさ・女らしさ。

② [言] 性④に同じ。

とあり、この意味においても、性はつくられたものであって、受動的なものという含意がある。

以上のことより、日本語概念としての「性」には、「生まれつきのさが」としての意味を残しながら、性=sex, sexuality, genderとしての意味が新たに付与されるなど複数の意味が内包されている。具体的には、どの意味においても生物学的には男女という二分された性の存在があり、その裏には男性、女性としての役割が付随し、その意味づけは時代と共に変化してきているということである。これらのことが日本語における「性」の主体性を不明瞭にし、その概念を複雑化、混乱させている要因の一つになっていると考える。

2. 性の構成要素

アメリカ心理学会 (American Psychological Association : APA)³⁾ は「性 (sexuality) の構成要素」として

- ① 生物学的性 (biological sex)
 - ② 社会的性役割 (gender role)
 - ③ ジェンダー アイデンティティ (gender identity)
 - ④ 性的指向 (sexual orientation)
- の4つをあげている。

生物学的性 (biological sex) は、性染色体による遺伝学的性や第一性徴である生殖器の違い、性腺から分泌される性ホルモンによる第二性徴を含めた解剖生理学的な差異によって決定する性である。

社会的性役割 (gender role) は、社会や文化が、生物学的性別からそれぞれにふさわしいとされる社会的期待を個人が内在化したパーソナリティ特性である。たとえば、日本社会において女性では化粧をして、スカートをはき、女らしい言葉遣いや態度が社会的に望まれるということである。アメリカの文化人類学者 Margaret Mead⁴⁾ は、南太平洋諸島で人類学的調査に従事し、大方の社会で生物学的な性別により分担されていると考えられていた男女の役割が、社会や文化によってつくられたものであり、時と場所が変化すればその役割も異なるということを発表している。

ジェンダー アイデンティティ (gender identity) は、ジェンダーとの同一性によって得られる自分自身の確信である。ジェンダーとは従来、社会的・文化的につくられた性として定義されていたが、江原⁵⁾によると、最近では当該社会において社会的・文化的に形成された性別や性差についての知識とする定義が採用されるようになった。また、この知識には文章化したり、記号化したり、絵画に描いたりすることができるような知識だけでなく、人びとが常識として持っている社会通念や社会意識も含まれるとしている。これらの知識は人々の言動に大きな影響を与え、人間の性に対する思い込みや偏見をつくり出していると考えられる。

性的指向 (sexual orientation) は、性の対象に対する指向であり、ある特定の性を持つ対象に情緒的的魅力や性的魅力を持続的に感じることである。その対象が異性である場合はヘテロセクシュアル、同性である場合はホモセクシュアル、異性・同性の両方である場合はバイセクシュアル、その他にも人間以外の対象である場合がある。この性的指向は、性的な成熟、すなわち生殖可能な時期になる青年期頃、明確になってくる。

以上のことから、「性」は単に sex や gender を意味するのではなく、sex や gender を包含した幅広い概念であり、人間の性に関わる意識と行動の統合体であると考えられる。

3. 人間の性の意義

ほとんどの動物における性行動は、妊娠可能な発情期

に限って発現する本能的な行動である。しかし人間は、生殖行動以外にも性行動がみられ、動物にとっての性の意義とは大きく異なっている。その意義について村本⁶⁾は、以下の5つをあげている。

- ① 男性、女性の両方を区別する性：性別としての性
- ② 種族の保存と繁栄のための性：生殖性の性
- ③ 性衝動・快楽性としての性
- ④ 愛を育て維持していくための性：親密性・連帯性としての性
- ⑤ 男性役割・女性役割を示す性による役割規定を示す性：性役割としての性

つまり人間の性は、ある時期に限定された種の保存と繁栄のための生殖を目的とした性や性的欲求の充足や性的刺激による快感から生じる快楽性だけではない。社会のなかで他者と生活していくうえで、常に寄り添っているものである。松村⁷⁾によると、人間の心と心の結びつき、パーソナリティとパーソナリティの触れ合いを伴うものであり、この連帯性は女性と女性、あるいは男性と男性という関係のなかから生じてくる心と心の結びつき、信頼関係も含んでいると述べている。

以上のことから、性は人間と人間のつながり、引いては人間を取り巻く社会や文化と密接な関係を持っており、人間の生そのものを意味するのである。

4. 生涯発達の視点からとらえるアイデンティティについて

アイデンティティは、Erikson の発達理論の中心概念であり、各ライフサイクルにおける課題達成と危機であるとともに、生涯を通して絶えず取り組んでいく発達プロセスでもある。Erikson⁸⁾ はアイデンティティについて、自我アイデンティティとは、その主観的局面では次のような自覚である。つまり第一に、自我の総合方法にそれ自体の斉一性と持続性があるという自覚である。この自我の総合方法は自分の個性的な存在のスタイルでもある。このスタイルが、自分が直接接触する共同体の重要な他者に対する自己の意味の斉一性と持続性とに合致しているという事実の自覚であると述べている。

すなわち、その概念は「どのような場面においても同じ自分であるという斉一性。昔も今も同じ自分であるという連続性」において、「個人の心理的側面における斉一性と連続性」と、社会のなかで他者との相互交渉による相互浸透行為により自分の存在価値を確認する「社会的側面における斉一性と連続性」を内包した包括的なものである。

そのアイデンティティにおいて最も未分化な初期の感覚が松村⁹⁾によると、乳幼児期において、親と子が相互交渉を行い、響きあうことができる相互浸透行為を、毎日毎日、繰り返す行なうなかで育まれる。これを Erikson¹⁰⁾ は基本的信頼感と名付け、自分は自分自身を信頼できるのだという根本的な感覚、ならびに、他人も本質的には信頼してもよいのだという感覚を意味するも

のであると述べている。そのため基本的信頼感が危機状態にあり、基本的不信感が強い場合、社会や集団のなかにおいて疎外感を感じやすく、対人関係の貧困化から、内に閉じこもってしまう傾向がある。この乳幼児期の課題が達成できていない状態では、次の発達課題である「自律性」へと進むこともまた困難となる。

以上のことから、アイデンティティとは人生においてその時々状況のなかで、自分にとって価値ある他者との相互交渉による相互浸透行為のなかで、主体的に育むその人自身に対する確信とする。

性アイデンティティの視座

性アイデンティティ概念に関する今日的視点を整理し、その意味を考えるために、性の意味・構成要素・意義、生涯発達の視点から述べてきた。これらのことをふまえ、性アイデンティティとは「個人のなかでまた他者との相互交渉による相互浸透行為の中で育むその人自身の性に対する確信」と定義したい。

この性アイデンティティは、ライフサイクルの各期、つまり乳幼児期から学童期、思春期、青年期、成人期、中年期、老年期において、目指すべき自己実現と危機を繰り返しながら生涯、発達し続ける。乳幼児期は、自己の性アイデンティティを育み、自己実現していくうえで、非常に重要な時期であり、身近な養育者の反応、行動に大きな影響を受けながら、性アイデンティティのコアとなる部分が確立していく。Maslow¹¹⁾は、大人になって愛や人望の欠乏に最も耐えられる人は、強く健康な自律的人間であると述べている。そしてこの強さや健康さは、生後2～3年の人生の初期において、安全、愛、所属、尊重などの高次の基本的欲求が満たされ、満足した状態が長期に渡って継続しているなかで生み出されるとしている。

学童期に入ると、マスコミュニケーションや仲間・友人との情報交換から、自分や同性、異性の性に関心や興味を持ちながらも、素直には表出せず、周囲への反発として表現されることも多い。Eriksonはこの時期の発達課題として「勤勉性」をあげており、同世代の仲間・友人とともに人間の性に関する学習を進めていく良い時期であると考えられる。

思春期に入ると、第二性徴の出現により、生殖可能な時期の始まりとなる。再度、自分の性アイデンティティと対峙し、受容と葛藤を繰り返しながら確立していく。ときには初潮や精通などの体の変化や自分の内から突き上げてくる性衝動に対し、強い葛藤をもつ場合もあり、登校拒否や家庭内暴力、特に女性では拒食や過食など摂食障害が急増している現状がある。

青年期から成人期においては、性的指向の対象者とお互いの個性を受容し、尊敬の念を持ちながら信頼関係を築いていく。また男性と女性においては、新たな生命の

創造という大偉業から、子どもの誕生と育児を経験し、世話をされる存在から世話をする「親役割」へと関係性の発達を進めていく。

中年期から老年期においては、性機能は徐々に低下し、様々な場面において身体的限界を感じはじめる。また人間関係においても、子どもの巣立ちや介護、退職、夫婦関係の見直しなど大きな変化が生じる。そのため、性アイデンティティは再び揺らぎはじめる。これまでの人生を振り返り、積み残してきた夢や課題とこれからの自分を照らし合わせながら今後の生き方を吟味・検討し、人間の性において中心的な意義である親密性や連帯性をコアに性アイデンティティを再確立していく。

これら人間の性は、すべてが個人のなかで意識され一人で行動することではなく、常に他者との関係性のなかで成り立っている。他者との理解、受容、共感、信頼、取引、攻撃といった様々な相互交渉をとおして、主体的に育んでいくものである。また、人間は常に生涯発達の過程で生活しており、常に変化の渦中にある。その様々な質と量の危機に際しながら、人間の性の諸側面を統合し、性アイデンティティを生涯にわたり発達させていくことは、容易なことではない。しかし、この自立し自律的に統合し、適応していこうとする力は、返せば自己実現への力強い原動力や人間の性に対するしなやかさの源になると考える。

おわりに

人間の性が回避、軽視化、歪曲化されることでセックスストレス、援助交際、配偶者・パートナーからの暴力などが増加している現代社会において、人間にとっての性の意義と豊かさを伝え、教えていく必要がある。人間の性の豊かさについて松村¹²⁾は、人間と人間の絆を深めようとする「連帯性」、男性と女性が親となり子どもを産み育てようとする「生殖性」、生きることを楽しもうとする「快楽性」を述べている。これらは、人生をよりしなやかに生き、豊かなものにすることができる。この人間の性のダイナミックスを知らずして性の貧しさのなかに身をおいている人々を看過することはできない。

それと同時に、個人の性アイデンティティの育ちを見守り、発達過程をサポートしていく関わりも重要であると考えられる。身近で細やかな変化を察知し、必要なときにずっと手をさし出せる、親子・兄弟・仲間・友人などによる私的なサポートは、人間社会においてなくてはならない絆である。しかし、その関係が希薄化している現代社会においては、これらのサポート体制が十分であるとはいえない。さらに「性」についてオープンに話し合うための土壌づくりが不十分なこともサポート体制を脆弱化させている要因の1つであると考えられる。そのため、これらのサポートが紡がれ、性アイデンティティの育ちを見守る体制を築いていかなければならない。その一翼を

担うのが、いのちを産み、生まれてくることを助ける私たち助産師である。具体的には、小学校や中学校などにおいて、一人ひとりが人間としてこの世に生まれて今ここに生きていることの尊さや、いのちの大切さを伝える出前講座、マタニティサイクルにおいて母子を取り巻く家族や祖父母の良好な関係性構築をサポートするパパママ教室や祖父母教室、病院での立ち会い分娩や家庭での出産における家族支援などである。

すべての人が、生を紡ぎつないでいく人間と人間のつながりをより強く、しなやかにし、豊かな性を生きていけるよう見守り、支えていく使命を感じてやまない。

なお、本文は、大学院の育成支援看護学特論・演習で行った概念検討において、先行研究に関する分析概要を中心に「資料」としてまとめたものである。

文 献

- 1) 小田亮. “一語の辞典「性」”, 三省堂, 東京, 41-43, 1996.
- 2) 朝倉京子. 保健医療領域におけるセクシュアリティ概念について, “ジェンダーで読む健康/セクシュアリティ—健康とジェンダーII—”(根村直美編著), 明石書店, 東京, 18, 2003.
- 3) <http://www.apa.org/about/index.aspx> (2010/8/10)
- 4) Mead Margaret. “Male and female: A study of the Sexes in a changing world”, 27ed., William Morrow USA. [田中寿美子, 加藤秀俊訳 “男性と女性 上 移りゆく世界における両性の研究”, 東京創元社, 東京, 1981.]
- 5) 江原由美子. ジェンダーとは?, “ジェンダーの社会学入門” (江原由美子, 山田昌弘), 岩波書店, 東京, 5, 2008.
- 6) 村本淳子. セクシュアリティ “母性看護学概論” (村本淳子, 森明子編著), 第2版, 医歯薬出版, 東京, 47, 2007.
- 7) 松村恵子. “母性意識の構造と発達” 真興交易医書出版部, 東京, 28, 2000.
- 8) Erikson Erik H. “Identity: Youth and Crisis” W. W. Norton, USA. [岩瀬庸理訳. “アイデンティティ 青年と危機”, 金沢文庫, 東京, 56, 1982.]
- 9) 松村恵子. “母性意識を考える” 文芸社, 東京, 166, 2005.
- 10) 前掲8) 120
- 11) Maslow A. H. “MOTIVATION AND PERSONALITY” 2nd ed., Harper & Row, USA. [小口忠彦訳 “人間性の心理学 モチベーションとパーソナリティ”, 産能大学出版部, 東京, 82-90, 1991.]
- 12) 松村恵子. 親役割, “発達支援のための生涯発達心理学 (前原武子編)” ナカニシヤ出版, 京都, 150, 2008.

Abstract

The aims of this study was to reconsider today's viewpoints about sexual identity aiming to bring up warmhearted humanity and enjoy life as a pliant gender, and think about its significance. Sexual identity is the major concept for the gender of human. From viewpoints of the meanof gender, its constituents/significance and lifelong developments, sexual identity was considered as a conviction for own gender through individual behaviors and mutually-permeable behaviors via interaction with others. It was considered to be not easy to cultivate own sexual identity throughout the life by integrating various characters of human sexuality. However, the power toward independent and autonomous integration and adaptation might produce a strong driving force leading to self realization and also a pliant attitude to human sexuality.

受付日 2010年10月13日

受理日 2010年12月9日